

## 里山での「人馬一體<sup>たい</sup>」の暮らし 日本を感じ、筆を走らせる



にしおか しゅうか  
**西岡 秀華** さん

上之郷の開けた山腹を歩く、大きな影。大字萱森で一棟貸しの別荘「ミルハウス」を手がける西岡秀華さんと一緒に暮らす馬たちです。西岡さんは、自身を「馬と書が好きの人」と表現します。

馬との出会いは、幼少期に読んだ絵本。大学時代にモンゴルで馬との生活を体験するなど、触れ合いと学びを重ねるうちに、日本の歴史は馬とともにあることに気づきました。このことが、現在のライフスタイルにもつながっているといます。

小学校の習字の授業が書の原点となり、淡墨で表現する翠軒流の書家としても活動する西岡さん。「ひらがなと漢字で、日本人らしい表現ができる」ことが魅力だといいます。今年3月には、初の個展「馬と書が織りなす物語」を開催し、遠方からも来場があるなど、注目を集めました。「人馬一體(右記)」は、馬は暮らしのパートナーという、西岡さんの生き方を色濃く表しています。

宿泊や個展に訪れた多くの方が、自然と共に生きる里山の暮らしへの憧れを口にします。「日本各地の里山には、独自の魅力がある。皆さんとつながりを作り、里山の暮らしを広められたら」と、西岡さんは描く未来について話しました。



## 発掘調査現場から (317)

## 川跡から探る纏向の歴史

～纏向遺跡第206次調査～

纏向遺跡第206次調査は、大字草川の県道沿いで実施しました。調査地の周辺では、これまでに南東から北西方向へと流れる複数の流路跡が確認されており、今回の調査地も復元された旧河道の推定ライン上にあります。

調査の結果、調査区内で北西方向へと流れる2本の流路跡を確認しました。そのうち1本の流路では、埋土の砂と小石が混ざりあって堆積した地層の中から、6世紀頃の円筒埴輪片など多くの土器が出土しました。流路の上層からは8世紀頃の土器が出土しているため、流路の埋没は奈良時代ごろだと考えられます。埋没後は鎌倉時代ごろから現代まで、耕作地として利用されていたようです。

このように、今回の調査では纏向遺跡北西部での地形復元の手掛かりが得られました。流路内から出土した埴輪片や奈良時代の土器は、これまでも周辺の調査で確認されており、この流路周辺に6世紀頃の古墳や奈良時代の遺構が存在していることを示しています。



調査区の全景  
(北から)▶